



13

# 高瀬舟

読書生活を豊かに  
未来の私にお薦めの本・季節のしおり 夏

森鷗外

ねらい

- ① 作品を読み味わおう。
- ② 人間の生き方について考えよう。

## 予習のワーク

### 読解の道しるべ

#### 1 『高瀬舟』のあらすじ

高瀬舟は京都の高瀬川を上下する小舟である。江戸時代、島流しを申し渡された罪人をその舟で大阪まで護送するのは、京都町奉行の配下にいる同心（下級の役人）の任務であった。その仕事は不快なものとして同心たちには嫌われていた。

夏も近づくとある夜、同心羽田庄兵衛は、喜助という罪人を高瀬舟に乗せて護送することとなった。だが、これまでの罪人の目も当てられない気の毒な様子と違い、喜助はどこか楽しそうにしている。それが庄兵衛には不思議でならなかった。いくら考えてもわからないその態度に、庄兵衛は島へ行く心持ちを喜助に聞く。尋ねられるままに喜助は庄兵衛に語り聞かせるのだった。島へ行く心持ち、貧しく苦しかった兄弟の生活、そして弟殺しをしてしまった経緯などを……。

弟の苦しみを見ているに忍びなかった喜助のしたことは、はたして人殺しであろうか、罪であろうか。話を聞き終えた庄兵衛には、どうしても腑に落ちないものが残るのだった。

#### 2 作者、森鷗外について

森鷗外は明治・大正時代に活躍した作家である。本名を森林太郎といい、大学卒業後、軍医となってドイツに留学した。夏目漱石と共に、日本の近代文学を代表する文豪といわれる。作品には『高瀬舟』の他、『舞姫』『雁』『青年』『渋江抽斎』などがある。

### 読解の道しるべを参考にして書こう。

『高瀬舟』は、同心の庄兵衛が、弟殺しをした  
 送る際、喜助から話を聞いたが、喜助のしたことが  
 に落ちないという物語である。

である喜助を護  
 であるのか、腑

#### 1 線の読み仮名を書きなさい。

- ① 稼ぎの多い仕事を探す。      ② 道端で銭を拾う。
- ③ 本の返却を催促する。      ④ 江戸時代の奉行。
- ⑤ 荷物の運搬を率領する。      ⑥ 若き日を顧みる。
- ⑦ 幾度も往復する。      ⑧ 勲章を授ける。
- ⑨ 掃除のための時間を割く。      ⑩ 現金の出納を管理する。
- ⑪ わずかな扶持米で暮らす。      ⑫ 時疫で命を落とす。
- ⑬ 所詮はかなわぬ夢だ。      ⑭ すっかり痩せてしまった。

2 線の片仮名を漢字で書きなさい。

- ① 心をオニにしてしかる。
- ② ヒサンな人生を送る。

- ③ ジヒの心で罪を許す。
- ④ 数字のケタを間違える。

- ⑤ つらいキョウグウに耐える。
- ⑥ 日々ケンヤクして暮らす。

- ⑦ ノキシタで雨宿りする。
- ⑧ サンバシで舟を待つ。

- ⑨ 何とかチヨウジリを合わせる。
- ⑩ 机にヒジを着く。

- ⑪ フシな動きを見とがめる。
- ⑫ カンニンしてくれと頼む。

3 次の各問いに答えなさい。

(1) 次の——線部の語句の意味を答えなさい。

- ① どうも挙動がおかしい人物だ。

- ② 不穏当な発言を取り消す。

- (2) 「目<sup>ま</sup>のあたり」という語句の使い方が正しいものを後から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 気に入った人を目のあたりに扱う。
- イ この近くにお寺があると目のあたりに見える。
- ウ 地場産業の復活を目のあたりにした。

工 あまりのひどさに目のあたりに見る思いだ。

(3) 次の語句を使って短文を作りなさい。

- ① 忍びない

- ② 途方に暮れる

1 線の読み仮名を書きなさい。

- ① 人気<sup>にんき</sup>の漫画<sup>まんが</sup>を読む。

未来の私にお薦めの本

教科書 p.94・p.95

1 線の読み仮名を書きなさい。

- ① 草履<sup>ぞうり</sup>をはいて町を歩く。

季節のしおり 夏

教科書 p.100

2 次の言葉の意味を後から選び、記号で答えなさい。

- ① 風薫る
- ② 麦の秋
- ③ 薄暑

- ア 初夏の、少し汗ばむ程度の暑さの頃のこと。
- イ 夏の初めの麦を刈り入れる時期。
- ウ 初夏の青葉が薫るように穏やかに風が吹くさま。

- ① ( ) ( ) ( ) ( )
- ② ( ) ( ) ( ) ( )
- ③ ( ) ( ) ( ) ( )







庄兵衛はいかに桁を違えて考えてみても、ここに彼と我との間に、大いなる懸隔のあることを知った。自分の扶持米ちまいで立ててゆく暮らしは、おりおり足らぬことがあるにしても、たいてい出納が合っている。手いっぱい③の生活である。しかるに、そこに満足③を覚えたことはほとんどない。常は幸いとも不幸とも感ぜずに過ごしている。しかし心の奥には、こうして暮らしていて、ふいとお役が御免になったらどうしよう、大病にでもなったらどうしようという疑懼※1が潜ひそんでいて、おりおり妻が里方さとかたから金を取り出してきて穴埋め③をしたことなどがわかると、この疑懼が意識の鬨よびの上に頭をもたげてくるのである。

④ いったいこの懸隔はどうして生じてくるだろう。ただうわべだけを見て、それは喜助には身に係累がないのに、こっちにはあるからだといってしまうばそれまでである。しかしそれはうそである。よしや自分が独り者であったとしても、どうも喜助のような心持ちにはなられそうにない。この根底はもっと深いところにあるようだ、庄兵衛は思った。

庄兵衛はただ漠然と、人の一生というようなことを思ってみた。人は身に病があると、この病がなかったらと思う。その日その日の食がないと、食ってゆかれたらと思う。万一のときに備える蓄えがないと、少しでも蓄えがあったらと思う。蓄えがあっても、また、その蓄えがもっと多かつたらと思う。かくのごとくに先から先へと考えてみれば、人はどこまで行って踏み止まることができるものやらわからない。それを今、目の前で踏み止まって見せてくれるのがこの喜助だと、庄兵衛は気がついた。

⑤ 庄兵衛は、今さらのように驚異の目をみはって喜助を見た。このとき庄兵衛は、空を仰いでいる喜助の頭から毫光※2が差すように思った。

※1 疑懼＝疑って不安に思うこと。

※2 毫光＝仏の眉間にある白い毛から放たれるといわれる光。

(森鷗外『高瀬舟』)

□ (4) ——— 線④ 「喜助には身に係累がないのに、こっちにはあるからだ」とは、

どういうことですか。最も適切なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 庄兵衛は係累の生活も支えている分、よりたくさんアの生活費を稼がなければならぬということ

イ 庄兵衛は係累と一緒に暮らしている分、まわりの人の言動に左右されやすいということ

ウ 庄兵衛は係累の期待を背負う分、自分一人がいい思いをするわけにはいかないということ

エ 庄兵衛は養わなければならない係累がある分、将来に対する不安を感じやすいということ

(5) ——— 線⑤ 「庄兵衛は、今さらのように驚異の目をみはって喜助を見た」について、次のⅠ・Ⅱに答えなさい。

□Ⅰ 庄兵衛はどんな思いで「喜助を見た」のですか。次の□に入る言葉を文中から書き抜きなさい。

人は暮らしの中でついつい


と考えると

まうものだが、喜助は、


ということを今、

目の前で見せてくれているのだ、という思い

□Ⅱ このとき喜助の姿は庄兵衛の目にどのように映りましたか。それがわかる部分を文中から書き抜きなさい。

練習問題 3

教科書 p.88上段ℓ.3～p.90下段ℓ.2

1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「弟殺しの罪人として島流しにされる喜助は、護送する高瀬舟の同心庄兵衛に問われ、こと細かく自分のしたことを話す。」

「弟は目で私のそばへ寄るのを止めるようにして口をききました。ようようものが言えるようになったのでございます。『すまない。どうぞ堪忍してくれ。どうぞ治りそうにもない病気だから、早く死んで少しでも兄貴に楽がさせたいと思ったのだ。笛を切つたらすぐ死ぬるだろうと思つたが、息がそこから漏れるだけで死ぬない。深く深くと思つて力いっぱい押し込むと、横へ滑つてしまった。刃はこぼれはしなかつたようだ。これをうまく抜いてくれたらおれは死ぬるだろうと思つている。ものを言うのが切なくなつていけない。どうぞ手を貸して抜いてくれ。』と言うのでございます。弟が左の手を緩めるところからまた息が漏ります。私はなんと言おうにも、声が出ませんので、黙つて弟の喉の傷をのぞいてみますと、なんでも右の手に剃刀を持って、横に笛を切つたが、それでは死に切れなかつたので、そのまま剃刀を、えぐるように深く突つ込んだものと見えます。柄がやつと二寸ばかり傷口から出ています。私はそれだけのことを見て、どうしようという思案もつかずに、弟の顔を見ました。弟はじつと私を見つめています。私はやつとのことです。『待つていてくれ、お医者を呼んでくるから。』と申しました。弟は恨めしそうな目つきをいたしました。また左の手で喉をしつかり押さえて、『医者があるになる、ああ苦しい、早く抜いてくれ、頼む。』と言うのでございます。私は途方に暮れたような心持ちになつて、ただ弟の顔ばかり見ております。こんなときは、不思議なもので、目がものを言います。弟の目は『早くしろ、早くしろ。』と言つて、さも恨めしうに私を見ています。私の頭の中では、なんだかこう車の輪のような物がぐるぐる回っているようでございましたが、弟

(2) 弟の傷を見てからの喜助の心理状態と言動は、どのように変わつていきま  
すか。そのことを順にまとめた次のメモの( ) A～Cに入る言葉を、それ  
ぞれ文中の言葉を使つて書きなさい。

I ( ) A ( )

II 「お医者を呼んでくるから。」と言つた。

III ( ) B ( )

IV ( ) C ( )

V 弟の言つたとおりにしてやらなくてはならないと思つた。

□ A ( )

□ B ( )

□ C ( )

□ (3) — 線①「恐ろしい催促」とありますが、どんなことを催促しているの  
すか。

□ (4) — 線②「お奉行様の判断」とは、どのような判断のことですか。最も適  
切なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 喜助は罪人であるという判断

イ 喜助は罪人とはいえないという判断

ウ 喜助はうそを語つているという判断

の目は恐ろしい催促をやめません。それに、その目の恨めしそうなのがだんだん険しくなってきた、とうとう敵の顔をでもにらむような、憎々しい目になつてしまいます。それを見ていて、私はとうとう、これは弟の言ったとおりにしてやらなくてはならないと思いました。」(中略)

庄兵衛はその場の様子を目のあたり見るような思いをして聞いていたが、これが果たして弟殺しというものだろうか、人殺しというものだろうかという疑いが、話を半分聞いたときから起こってきて、聞いてしまつても、その疑いを解くことができなかつた。弟は、剃刀を抜いてくれたら死なれるだろうから、抜いてくれと言つた。それを抜いてやつて死なせたのだ、殺したのだとは言われる。しかしそのままにしておいても、どうせ死ななくてはならぬ弟であつたらしい。それが早く死にたいと言つたのは、苦しさに耐えなかつたからである。喜助はその苦を見て忍びなかつた。苦から救つてやろうと思つて命を絶つた。それが罪であろうか。殺したのは罪に相違ない。しかしそれが苦から救うためであつたと思うと、そこに疑いが生じて、どうしても解けぬのである。

庄兵衛の心のうちには、いろいろに考えてみた末に、自分より上のものの判断に任すほかないという念、オオトリテエに従うほかないという念が生じた。庄兵衛はお奉行様の判断を、そのまま自分の判断にしようと思つたのである。そうは思つても、庄兵衛は、まだどこやらに腑に落ちぬものが残つてゐるので、なんだかお奉行様にきいてみたくてならなかつた。

次第にふけてゆくおぼる夜に、沈黙の人二人を乗せた高瀬舟は、黒い水の面を滑つていった。

※1笛Ⅱのどぶえ。 ※2オオトリテエⅡ権威・権力者。

(森鷗外 『高瀬舟』)

□(1) 喜助の弟が死のうとした理由を語っている一文を文中から探し、その初め

の五字を書き抜きなさい。


工 喜助は真実を語っているという判断 ( )

□(5) 喜助の話を聞き終わった直後の庄兵衛は、どのような思いを抱きましたか。最も適切なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 喜助が罪人であるかどうかは、権威あるお奉行様の判断に任せるしかないのだというあきらめの思い

イ 弟を苦から救うための人殺しだったのだから、なんとか喜助を助け出す方法はないものかという思い

ウ 弟を苦から救うためとはいへ、喜助はやはり人殺しなのだから島送りになるのも仕方がないという思い

エ 喜助は人殺しとされたが、弟の苦を見ているに忍びなかつたのだから罪といえるのだろうかという思い ( )

□(6) この場面はどんなことを中心に描かれていますか。最も適切なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

ア 殺人と貧困 イ 自殺の残酷さ

ウ 安楽死と罪 エ 弟殺しと罪 ( )

(7) 次の文章は、『高瀬舟』の作者森鷗外について述べたものです。□ a )

c) に入る言葉を後から選び、記号で答えなさい。

森鷗外は明治・大正時代に活躍した作家であり、□ a) でもあつた。□ b) への留学の後、□ c) を発表する。夏目漱石とともに、日本の近代文学を代表する文豪といわれる。

ア フランス イ 軍医 ウ 草枕

エ ドイツ オ 牧師 カ 舞姫

□ a) ( ) □ b) ( ) □ c) ( )

## 観点①

\*『高瀬舟』の内容を話の流れに沿って次のようにまとめました。空欄に入る言葉を後の□から選び、書きなさい。

## 物語の背景

高瀬舟は、京都の高瀬川を上下する小舟で、遠島を申し渡された罪人を大阪まで護送するためのものであった。

罪人とその親類が舟の上で語り明かす

① □ な境遇を耳にすること

になるため、高瀬舟の護送は、同心にとっては不快な職務であった。

## 庄兵衛の疑問

罪人は目も当てられぬ気の毒な様子をしているのが普通であるのに、喜助が

いかにも楽しそうで、

② □ にでも乗ったような顔をしているのは、

どういふことだろう。

## 喜助の話①

庄兵衛が喜助に、島へ行く心持ちを聞く。

→喜助が島へ行くのを

③ □ にしていないように見えるため。

## 喜助の身の上と、今の思い

島に行くということ、ほかの人には悲しいことであろうが、自分はどこにも「いい場所」がなかったため、島にいろと言われるのはありますが

## 観点②

\*喜助がほかの人たちと違うところを次のようにまとめました。それに対する庄兵衛の思いも考えて、空欄に入る言葉を後の□から選び、書きなさい。

## 高瀬舟での様子

「いかにも神妙に、いかにもおとなしく」しているが、「権勢にこびる態度ではない」。

横になろうともせず、月を仰いで黙っている。「額は晴れやかで、目にはかす

かな ① □ がある。」

「いかにも楽しそうで、役人に対する気兼ねがなかったなら、口笛を吹き始めるとか、鼻歌を歌いだすとかしそう」なほどである。

↔

「罪人は、いつもほとんど同じように、目も当てられぬ気の毒な様子をしていた。」

↓庄兵衛は「不思議だ、不思議だと、心の内で繰り返している。」

「この男はどうしたのだろう。庄兵衛がためには、喜助の態度が考えれば考  
えるほど ② □ なるのである。」

## 暮らしぶり

島へ行くのが悲しいことであるのは、「それは、世間で

③ □ をしてい

た人だから」である。

「私のいたして参ったような苦しみはどこへ参ってもなかりと存じます。」

たい。

初めて自分の物として持っている

④

を、仕事の元手にし

ようと楽しみにしている。

庄兵衛は、自分との余りの違いに、人の満足について思いをめぐらし、

喜助の頭から

⑤

が差すように思った。

喜助の話2

庄兵衛が喜助に、人をあやめた訳を聞く。

喜助の、弟殺しの事情

小さいときから二人で働いて暮らしていたが、弟が病気で働けなくなっ

た。ある日家に帰ると、弟が剃刀で

⑥

を切り死にかけていた。

苦しいので早く抜いてくれと催促され、剃刀の柄を握って引いたところに、  
ちょうど近所のばあさんが入ってきた。

庄兵衛は、これが人殺しかと、

⑦

に落ちないものが残った。

喉	腑 <small>ふ</small>	毫光 <small>ごうこう</small>
慈悲	悲惨	肘
遊山船 <small>ゆざんふね</small>	二百文	苦

↓「彼と我との相違は、いわば

④

の桁が違っていただけ」

心持ち

「骨を惜まずに働いて、ようよう口を糊のりすることのできるだけで満足した。」

「今まで得がたかった食が、ほとんど天から授けられるように、働かずを得られるのに驚いて、生まれてから知らぬ満足を覚えた」

↔

庄兵衛は「手いっぱい生活である。しかるに、そこに満足を覚えたことはほとんどない。」

心の奥に

⑤

が潜んでいて、おりおり「意識の闕とぎの上に頭をもた

げてくる。」

↓「人はどこまで行って踏み止まることができないものやらわからない。それを今、目の前で踏み止まって見せてくれるのがこの喜助だ」

罪

自分の利益のために弟を殺したのではなく、「苦を見ているに忍びなかった。

苦から

⑥

と、思っって命を絶った。」

↓「これが果たして弟殺しというものだろうか」という疑いが生じて解けない。

輝き	救ってやろう	わからなく	心得違い
情	そろばん	疑懼 <small>ぎく</small>	楽